

忘れられた崇高論

—カール・グローセ『崇高について』(1788)

Eine vergessene Theorie des Erhabenen

— Carl Grosses *Über das Erhabene* (1788)

亀井伸治

青年期のティークとE. T. A.ホフマンを熱狂させたことで知られ、英国・ドイツ双方のゴシック小説とドイツ・ロマン主義との間の関係で特に注目されている作品に、十八世紀末の著述家カール・フリードリヒ・アウグスト・グローセ Carl Friedrich August Grosse (1768-1847) の秘密結社小説『守護精霊』*Der Genius* (1790-94) がある。しかし、1790年代の小説の発展におけるグローセへの評価は、彼に、「崇高」自体について論じた著作があることにより、思いもよらぬ興味深い様相を帯びる。なぜなら、『守護精霊』をはじめとするグローセの諸作を含むゴシック小説の最も興味深い特徴のひとつは、エドモンド・パークの『崇高と美の観念の起源についての哲学的探求』(1757) によって表明された新たな美学概念の相としての崇高の使用であり、1764年から1820年代までに書かれた作品群を理解する為にこれを把握することは重要だからである。ゴシック小説では、受容者が解釈できない感覚情報から発生する混乱が、恐怖の経験に対する内的葛藤の軸となり、そうした物語を読む者にも、想像から生じる「不安の喜び」という複合感情が与えられる。こうして、畏怖の感情と喜ばしい恐怖が、乾いた理性と極端な感傷への異議の一端としての当時のジャンル文学における崇高の表現の中核となった。

グローセの『崇高について』*Über das Erhabene* は、1788年にゲッティンゲンとライプツィヒで出版されたが、モーゼス・メンデルスゾーンの『美学における崇高と素朴についての考察』(1758)、カントの『判断力批判』(1790) 第一部第二章、シラーの『崇高について』(1793) といった金字塔的論考の陰に隠れて忘れられてきた。だが、グローセのこの本を読むと、彼が同時代の英国とドイツの主要な美学理論に精通していたことが分かる。彼の論議は、ヨーハン・ゲオルク・シュロツァーが解釈し翻訳したロンギノスに基礎を置いているが、上記のエドモンド・パークの理論に対する批判、そして、想像力の機能、そして魂の独立性と活動性に関する主張には、カントの観念論に通じる点がある。その他の問題提起や思索は、ピクチュアレスク概念やアン・ラドクリフによる恐怖概念の定義付けのような、美学的には上記の件より小さいが、ロマン主義にとっては大事な発展を予見している。

当時、弱冠の医学生だったグローセが『崇高について』で論じている内容はどれも独創的なものではないし、その考察の仕方も決して精密なものとは言えないが、それでもそこには、激しく変化する時代の思考の反映と、美学における新たな展開を予示する鋭敏な資質を認めることができる。

今回の報告では、日本ではほとんど知られていないこの著作の、主に第一章で扱われて

いるグローセの崇高の概念規定について、ジェイムズ・ビーティやリチャード・ペイン・ナイトなど当時の英国の理論や文藝の影響を中心に考察しつつ紹介した。